

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

#### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：教務機構	担当部局：教務機構・教務機構(高等教育推進センター)
大項目	6 教育内容・方法・成果 《全学的な視点》	
中項目	6.3 教育方法	
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。	
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)	
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性	
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性	
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施	

#### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

##### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。  
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。  
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。  
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 履修者数が教室の収容定員を超える科目をなくす。(教務機構)	→教室収容定員を超えた履修科目数、履修制限科目数(教務機構)	C	C	B	B	B
2. 学習効果を向上させるために、全学履修登録単位数の上限を年間50単位未満にする。(教務機構)	→50単位以上の学部・学科をなくす	B	B	B	B	A
3. 学習を進める上で必要な項目が適切に盛り込まれたシラバスを設計し、記載を徹底する。(教務機構)	→シラバスの項目の年度ごとの検証、項目未記入件数(教務機構)	B	B	B	B	A
4. 共通教育としての初年次教育に高学年の学生によるピアサポートシステムを制度化する。(教務機構・高等教育推進センター)	→ピアサポートシステムの設置(教務機構・高等教育推進センター)	C	C	B	A	A
5. 全教員が授業調査結果を教育改善に結びつける→全教員に授業調査結果についての改善コメントの提出を求める。(高等教育推進センター)	→授業改善コメント用紙の提出率を50%にする(高等教育推進センター)	C	B	B	B	B
6. GPA制度を改善し、各種の選考での積極的利用を可能にする(教務機構)	→新たなGPAスコア算定基準の策定、各種選考でのGPAの利用度(教務機構)	C	C	C	B	B
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
7. 成績評価基準の厳格性を高める(教務部)	→科目ごとの成績分布の公表(教務部)		C	B	B	B
		☆				

## 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか ソフト面からは、これまで同様教室調整の際に、過去数年の履修傾向を考慮のうえ教室割り当てを行ってきた。ハード面からは、新たな建設予定の講義棟については、履修データを分析し最も不足する教室規模を割り出し教室サイズを決めるなどの対応を行ってきた。また、使用率が低い教室については、使用率を高めるため、授業形態にふさわしい教室改修に向け、学部と教務が協同のうえ、法人に対して要望してきた。2013年度には第5別館の教室改修(部屋そのものの分割や学生卓の分割)、H号館では、規模や用途を考えた教室設置を行った。履修制限科目については、必要な科目に対して制限をかけ、事前申込(予備登録)科目としてきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度学部科目含む全体の状況としては、7500あまりのクラス開講分中、175クラスが教室定員を超過しており、また教室定員超過は200名以上の履修者の科目が約6割を占める状況である。この状況は例年と大きな変化はない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後についても継続して、学部等の協力を得て、開講曜日・時限の分散化をさらに推進する。また、使用率が低い教室については、使用率を高めるため、授業形態にふさわしい教室改修に向け、学部と教務機構が協同し法人に対して予算要望を行う。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務委員会のもとでのFD部会にて、各学部にて年間の履修単位数の上限50単位未満となるよう、50単位以上の学部を検討を依頼してきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2012年度には教育学部が、2013年度には国際学部が検討を行い、それぞれ2013年度、2014年度から上限が48単位となった。編入学生が1年間に登録できる履修単位数を50単位未満に設定することが今後の課題である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 編入学生が1年間に登録できる履修単位数を50単位未満に設定することについては、編入学時の単位認定数と卒業必要単位数との関係で、4年間での卒業が難しくなる等もあるため、各学部において引き続き検討をゆだねる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 旧システム(2013年度まで)では、「講義目的・到達目標」「各回ごとの授業内容」「成績評価方法・基準」を必須項目として、遺漏の無い記載を求めてきた。また、内容の精粗については、各科目提供部署にチェック体制の強化を依頼し、多少の温度差はあるが取り組みがなされてきた。2013年度秋学期からは、学生システムリプレースに同期して、シラバスシステムもリプレースし、「授業目的」「到達目標」「関連科目」「授業時間外の学習(準備学習等について)」を個別項目として設定、「成績評価」についても最終評価における各評価事項の比率(%)入力を必須化し、適切に記入されていないとシラバス作成を完了できない設定とした。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各項目の詳細化、必須化により、項目未記入はほぼ無くなった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か システムとしてはほぼ改善し、未記入のままでは終了できないシステムとした。このため、今後は、記載内容の精粗のチェック方法について各学部の情報交換等にて、大学全体で精粗の解消を進める。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆

目標4	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか  本学授業での学習指導は授業担当者に任されていたが、共通教育センターで学修支援制度として学部学生によるラーニングアシスタント(Learning Assistant, L. A.)制度を検討のうえ、教務委員会にて、2011年度秋学期および2012年度春学期の教育活性化資金での試行的なLA制度の運用を承認し、その運用結果を踏まえて2012年度秋学期から大学の正式な制度として位置づけられ、運用を開始した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か  2013年度受審した認証評価にて「長所として特記すべき事項」として、「・・・全学的な取り組みとして授業・学習支援体制を構築している。特にLA制度においては、授業運営補助と授業外の学生ピアサポートと2種類に区別し、すべての学部で活用され、事前研修を受講した学生によるきめ細かい支援を行っている。LAの授業への参画は、学生の授業理解力の向上だけでなく、授業評価アンケートおよびLAアンケートによる検証の結果、学生の主体的な学習を促進させていることが証明されており、学生同士で学習意欲を高め合う教育方法として、評価できる。」と高い評価を受けた。また2013年度に募集した2014年度LAでは、授業でのLAのサポートにより授業理解が促進されたため、今度は自らがLAとして下級生を支援したいという理由で応募した者が多数おり、双方向型教育の促進、教育・学習の活性化にも成果があった。なお、2013年度は11学部2センターでLA制度を活用した。未導入のセンターでの活用、既導入の学部・センター等での更なる活用のための予算不足が課題。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か  現行の配分予算では一層の教育・学習効果を高めるための新たな取り組みを行うにも限界があるとの意見が学部・センターより複数出されていること、未活用のセンターもあること、LA予算(LA雇用経費)は人件費のため、各部局予算の転用ができないことから、大学経路にて法人に2015年度からの予算増額を要求している。また、LA研修についても引き続き実施し、LAとしてのスキル向上も継続して行う環境を整備する。</p> <p>その他</p>	☆  ☆  ☆
目標5	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか  授業改善コメント用紙のダウンロード方法がわかりにくいという意見が多くあったため、2012年度から、コメント入力用のホームページを設け、入力してもらう方式に改めた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か  2013年度の授業改善コメントの提出率は、全体で35.4%(マークシートでの調査実施担当者延2,385名中846名)と、2012年度(35.8%: マークシートでの調査実施担当者延2,335名中837名)とほぼ同率となった。2010年度の20%程度から大幅に改善しているが、目標としていた50%には届かなかった。調査結果によれば、学生の満足度は高く、2005年度から実施してきた調査によって、授業改善が行われ、教員個々の改善の余地が少なくなっていることが考えられる。  現在は、個々人の改善のみでなく、組織的な観点からの教育改善を推進するため、各授業提供部署が授業調査の結果から改善コメントを含む総評を作成し、調査報告書に掲載するなど組織的な取り組みにも力を注いでいる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か  個々の授業改善に活用できるよう、授業調査の調査項目について、2015年度に向けて見直しを行う。</p> <p>その他</p>	☆  ☆  ☆
目標6	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか  2010年度に新たなGPA算定基準の見直しを策定したが成案には至らず、その後算定基準の見直しは進捗していない。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か  GPAの活用については、全学的には留学派遣時の選考や成績優秀者の顕彰制度等に活用しているが、今後は学生による履修管理、チューター制度などによる履修指導への活用に向けての検討が必要である。学生に対しては、2012年度から各学部等の履修心得に、全学共通の内容で制度趣旨やこれまで以上に具体的な算出基準を掲載し、GPA制度への理解向上が図れ、計画的な履修を行うよう勧めている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か  新たなGPA算定基準・制度の検討を近々に行うことは予定していないが、2015年度より開始予定で検討を進めているアカデミックアドバイザー制度での活用が見込まれる。</p> <p>その他</p>	☆  ☆  ☆

目標7	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 実質的な成績データの公開および学内での意識共有を目的に、2012年度春学期から成績統計データを学内イントラネットで公開している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各学部が必要に応じて、データを活用し、学内での各種検討に活用できるようになった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後は成績統計データの活用方策の検討に加え、成績評価基準をどのように厳格化できるかが課題であるが、現時点では 具体策は検討できていない。	☆
		その他	☆
備考			☆